

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370300311		
法人名	医療法人 勝久会		
事業所名	グループホーム綾の里		
所在地	岩手県大船渡市三陸町綾里字清水125-2		
自己評価作成日	平成27年10月2日	評価結果市町村受理日	平成28年2月5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.jp/03/i/index.php?act=on_kouhyou_detail_2014_022_ki_hon=true&ji_gyosyoCd=0370300311-00&PrEfCd=03&VerSiOnCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益財団法人いきいき岩手支援財団
所在地	岩手県盛岡市本町通3丁目19-1 岩手県福祉総合相談センター内
訪問調査日	平成27年11月4日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

周りには海、山、畑があり自然豊かな環境に囲まれた地域に事業所が位置している。今年の2月にデイサービス、小規模多機能ホーム、グループホームが合築した「綾の里」が完成し、新築移転した。ホームを出れば、目の前は三陸鉄道が走っており、天気の良い日は散歩に出掛けやすい環境にある。ホームには小さな畑があり、利用者様も収穫を楽しんだり生き生きとした生活を送っている。建物内にデイサービス、小規模多機能ホームがあり、行事など利用者同士の交流、こども園、小、中学校との交流もある。以前の事業所は浸水区だったが、高台に移転したことにより災害面で、ご家族様、ご利用様、職員の不安も軽減されている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

日当たりの良い南東の方向に開けた、なだらかな斜面から遠く海を見渡せる。津波災害が及ぶ心配もなく、季節を感じられる地に、法人内の3事業所(デイサービス、小規模多機能ホーム、グループホーム)で構成された「綾の里」が新築移転し、地域の中の「里づくり」が始まり、半年が過ぎた。事業所では、利用者が地域とつながりながら、当り前の暮らしを続けられるよう、その基盤作りに積極的に取り組み、地域密着型サービスの意義や役割を考えた方向での実践を目指している。高齢者の楽しみの「デイサービス」、色々な介護サービスが組み合わせられた「多機能ホーム」、認知症に対応し本人とその家族の安心と満足の「グループホーム」と、三者一体となつての「里づくり」は、地域の高齢者福祉の拠点としての期待が大きい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	朝のミーティングで理念を復唱し、声に出す事で意識付けし、理念を共有するようにしている。リビングに掲示し、誰の目にも付くようにしている。	本人本位のケアを大事にとの理念を復唱し、声出しの効果考えた発想で実施しているほか、利用者も朝会の時、その献立を読み上げ、声出し等によっても共有を図っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の小、中学校から行事のお誘いがあり、参加したり、ホームを訪問しての交流がある。地域の草刈りにも参加し、新しく移転した場所にてご近所にホーム便りを配布しホームのことを理解して頂いている。9月には地域住民に対し事業所の説明会、介護保険の説明会を行った。	事業所は、地域内での新築移転であるが、近隣にも災害での新築移転住宅などもあり、新しい近隣関係を作るところとしており、自治会への加入、総会出席、地区共同作業のほか近所へホーム便りを届け、事業所の案内、介護保険の説明会を行って、新たな地域との繋がりに向けて取り組んでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	利用者様と一緒にホームのお便りを配ったり、夕涼み会等で、地域住民とふれあうことで、認知症の人の理解していく場を設けている。又、災害公営住宅が近所にあることから、介護サービス出張相談会も行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	利用者、家族さんを含み15名程度で開催している。毎回、活動状況を報告し、議題を決め会議を開催し、参加者から助言を頂いている。行政からの参加もあり、話し合いを行い、災害時に備え、防災無線を受信できる戸別受信機を設置した。	運営推進会議の機能の活用は、参加メンバー(構成)の検討も大事と考え、地元の小学校長の参加や、防災関係などの公署(警察、消防ほか)等には、会議内容などに応じて出席を依頼している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市で行われている地域ケア会議に参加したり、事業所で行われている、運営推進会議に参加していただき、制度面の助言を頂いたり、こちらからの要望に応じていただいている。又、ホームからも申請、報告等で担当課に出向き、情報の共有をしている。	介護保険制度上や、福祉関連事項などの相談事案を受けてもらうほか、各種届出に、市地域福祉課に出向いている。市の緊急時広報の(外部スピーカー放送が届きにくい)直接受信の要請を受け入れてもらうなど協力を得ている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	出入り口の施錠せず、利用者の方が自由に出入り出来るようにしている。転倒の危険性がある方でも本人のペースに合わせて散歩や掃除等を行っている。	法人内に身体拘束に関する委員会が設置されており、研修の場や、資料の活用を行っている。出入口の施錠は行わずに、利用者の自由を確保し、散歩などの外出には、職員が同行することで、転倒などのリスクに対応している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内研修に参加し、職員全員でスピーチロックを含めた虐待防止に努めている。委員会で作成したマニュアルを活用し、いつでも対応できるようにしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業を利用されている利用者があり、本人や家族の環境やニーズに応じて関係者と話し合いの支援を行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前の説明時十分に時間をかけて、理解して頂けるよう努めている。利用料金や起こりうるリスク、重度化や看取りについての対応策、詳しく説明し、同意を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に投書箱を設置している。利用者からは日常会話から、食事やドライブ等、希望を聞いて対応している。面会、病院受診時、ケアプランのサインをもらう際に家族に要望を聞き、日常生活に反映させている。	家族との関係作りを大事に考え、電話での意見・要望にも対応し、ケアプランに対する家族の意向の組み入れなど、家族との面談も大事にすることのほか、メールなどを活用して関係を作っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	会議や申し送りノートを活用し、職員からの意見を発信する環境を整えている。また、普段から気づいたことを管理者に提案し、職員とコミュニケーションをとりながら反映するようにしている。	利用者の日常生活に関わることは、申し送りノートの活用などで、具体的な提案として取り上げ、改善に向けている。事業運営上の職員の考えや意見が、出しやすい雰囲気作りが大事と管理者は考えている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	臨時雇用職員に関しても資格取得に向け支援を行っている。資格取得者には正規雇用採用をする機会がある。代表者は、給与水準に関して介護職員の改善待遇に向けて、積極的に国や県に働きかけを行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修に参加したり、疾患や緊急時の対応等現在、必要としている内容を中心に昨年とは講師を替え、自ら資料を作成し勉強会を行っている。又、マニュアル作成、見直しも個々に行わせることで日々の業務について考える機会を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム主催の会議や研修に参加し、勉強会や情報交換を行っている。又、3ヶ月に1回、法人内のグループホームの管理者、計画作成担当者が集まり、情報共有を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の実態調査に2名で訪問することで訪問することで、様々な視点から情報を得ようとしている。事前に不安なことや要望等を伺い、入居後の不安を軽減できるよう、努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の実態調査に訪問し、家族の要望を伺い、入居後も気軽に相談できる環境作りに努めている。面会に来られない家族へは、電話やメールで近況報告したり、受診先で面会できるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前の実態調査やあ居宅ケアマネからの情報を基に、本人、家族が必要としているサービスを把握し、説明できるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	共に生活している意識を持てるよう、掃除、食事準備、食後の後片付け、畑作業と一緒にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時、ホームでの様子を伝えるだけでなく、行事などへ、家族を招待し、本人、家族、職員が共に過ごす機会を設けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人や家族より聞き取ったり、面会に来られた方々に聞いたりしている。又、地元のイベントやドライブへ出かけている。お盆は外泊、外出をし、墓参りに出かけたり、お正月も帰宅し、自宅で過ごせるよう支援している。	利用者本人からかつての馴染みの事柄が聞き出しにくい場合、家族と利用者本人が一緒の時や、通院、食事、外出時など、色々な場面で情報収集をしている。出張理容の活用なども、新しい馴染みの関係構築になることも考えられる。また、着慣れた衣類などにも、こだわりを感じられると思われることから、大切に考えている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者に同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者間で掃除、茶碗拭きなどすることにより、利用者同士の関わりも見られている。一人が活動を始めると、他利用者も協力意識が見られ、一緒に活動している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスが終了しても、職員が施設へ行き、交流が続いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段のコミュニケーションや、家族からの情報、本人の行動をもとに、希望等を把握しそれらをケアプランや申し送りノートを活用し、共有している。	利用者個々の思いは、その人らしく生き続ける土台で、その支援に向け、本人の意向の把握の大事さを思い、普段の対話や、申し送りノートの活用、家族等の情報を集め、それらを職員が共有し、支援に向けている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者との日常会話や家族、居宅ケアマネから情報収集を行い、生活歴や生活環境の把握に努めてはいるが、日常会話が困難等、情報が不足している利用者もいる。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活している中で1人1人の日々の変化を見逃さないよう、心身状態、能力低下がないか把握し、小さな変化でも常に記録に残し、職員間で情報を共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	モニタリングを充実させ、次回プランに反映できるようにしている。カンファレンスについては参加できない医療連携の看護師にも後日、説明し、意見を聞くようにしている。家族説明時にはあるが、家族からの意見も聞いている。	的確なモニタリングとカンファレンスを活かしたプラン作りをしている。医療連携での看護師の意見も取り入れ、家族の同意のもと、介護計画が作られている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	病院受診の指示、家族からの要望、本人の体調変化等、記録し、職員間で情報の共有をしながら実践、介護計画へ反映させている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ADLの低下や状態の変化の際は、家族と相談し、状況に応じた他事業所の説明をしている。必要時は、その事業所へ相談し、家族へ報告し対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	本人の希望に合わせ、近所を散歩し3ヶ月に一度発行しているホーム便りを利用者の方と近隣や小中学校へ配布したり、近隣の方と交流している。又、月1回の移動図書館も利用している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人、家族が希望するかかりつけ医を受診し、その都度、状態報告等を家族へ行っている。受診連絡表を作成し、主治医からの指示を記入してもらったり、ホームでの様子をわかるように伝えている。	家族によるかかりつけ医での受診を原則としているが、家族の事情で職員の同行支援もあり、その都度、家族に受診の状況報告を行っている。受診連絡表により、主治医から指示を受けると共に、本人の日常の様子を伝えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に1回、兼務看護師がホームを訪問し、健康チェック、指導している。個人の申し送りファイルを活用し、情報の共有に努めている。又、状態変化時には、その都度、相談し助言を頂いており、24時間、看護師直通電話があり、対応可能となっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	職員、家族、病院関係者と密に連絡を取りながら、状態の把握に努め、退院後も安心して生活できるように家族と共に支えている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居者の状態変化を家族に説明している。本人、家族の意向を尊重し、重度化に近づく状況では、法人内のクリニックの全面協力を得て家族の意向に沿った方向で対応し、介護老人保健施設への入居支援も家族に説明する等により対応している。	利用者の状態の変化、特に重度化に向っている状況では、法人内のクリニックの協力を得て、家族の意向に叶うような方向で、対応している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	訪問看護、小規模多機能ホームと連携し、グループホーム職員でマニュアルを作成し、職員同士、意見を出し合い訓練を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	早期に災害に対応できるように、地元職員が駆けつけるモバイル通信があり、携帯電話を通じて知らせている。毎月、防災についての研修を開催している。小規模多機能ホームと隣接しており、夜間の協力体制も整っている。綾の里の職員も近所に住んでおり、災害にも備えている。今後は小規模多機能ホームと合同で夜間想定火災訓練を行う予定である。	緊急時、職員への連絡網としてモバイル通信があり、災害時の対応に向けている。法人内3事業(デイサービス、多機能ホーム、当事業所)が棟続きで配置しており、日常的に、協力し合っているところから、災害に関わる訓練なども合同で行う計画がある。災害時に、必要な備蓄品、機器(発電機など)の準備もあるが、その他の必需品についても検討している。	利用者一人ひとりの状態を見極めて、災害時に対する避難や災害後のリスクに備える検討が必要で、特に避難時に職員だけの誘導の限界をふまえて地域の人々や他事業所の協力が得られる仕組み作りが重要と考えられる。まず、法人内3事業所「綾の里」は一体的と考えられるが、地域の人々の協力が、どのように得られるか、具体策の検討が望まれる。この協力を地域に向けてお願いすることで、地域との関係作りがスムーズに進んだり、事業所への更なる理解と認識が深まる期待も考えられることから、今後の取り組みに期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	食事介助やトイレ誘導、入浴介助の際の声掛けに注意し、不快な思いをさせないようケアに当たっている。自尊心を損ねないケアに努めている。	人としての誇りを大切にしたケアを目指して、尊厳を損なうような言葉や、羞恥心対応にも心がけ、間違いのないよう職員同士で、注意し合っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	食事後の片づけ、庭の草取り、掃除等、手伝いたいという希望を尊重し、声掛けにて希望者に働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者一人一人のペースを大事に外出、散歩、買い物、食後の昼寝など希望に沿って対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に美容師の方に来て頂き、ホームで散髪を行って頂いている。なかには行きつけの美容室を利用されている方もいる。又、衣服は本人に選んで頂いている。外出時、化粧をされる方もおり、その都度、支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は旬の食材を使用し、飽きないように工夫したり、畑から収穫、食事準備や片づけにも参加して頂いている。	調理場が共用のリビングと一体になっていることから、調理の様子やその匂いなど、家庭の雰囲気を感じさせる。敷地内の畑からの収穫物、海のもの旬を大事にした食材など、マンネリにならないよう献立を工夫している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	体重の増減に気を配り、一人ひとりの状態を観察しながら、本人に応じた支援をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、利用者の状況に合わせた口腔ケアを行っている。利用者の状況や変化に合わせて、歯科衛生士にアドバイスをもらい、口腔ケアの方法を検討し、実施している。義歯の消毒を週に1度行っており、本人希望時も消毒を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を用い、個人の排泄パターンの把握に努め、定期的に声掛けし、トイレ誘導を行っている。尿意、便意の曖昧な方にはトイレで排泄できるように支援している。	排泄の自立に向けての声掛けや、トイレ誘導を積極的に行っている。排泄チェック表で本人のパターン把握や、動作の様子にも注意深く接している。身体状況から布オムツから紙パンツに変えるなど、変化にも対応し、衛生管理にもあたっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量のチェック、低下防止を行っている。乳製品や便秘に良い食材などを取り入れたり運動したり、排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	利用者の希望を聞き、時間帯などタイミングを合わせて入浴して頂いている。小規模多機能ホームと共同で午前、午後と分けて広々とした入浴場でゆったり入浴して頂いている。同性介助を望む方には日にちをずらしたり、担当を替え対応している。	法人内事業所の「小規模多機能ホーム」と棟続きで、隣接しているところから、入浴場を共用にして、午前・午後と入浴時間を分けての入浴で、広い入浴場でゆったりとした入浴が行われている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	体調を観察し、疲れや異変が見られる利用者には休息してもらうよう促している。夜間、良眠できるよう、日中、活動的に過ごして頂いている。室内温度を調整し、良眠を促している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬準備は職員が行い、服用の確認、チェックを徹底して行っている。職員が薬の内容を把握し、万が一の誤薬の対応も主治医へ相談し、薬についての意識づけを行っている。勉強会も行い、職員間で情報の共有も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人一人の得意分野を把握し、役割分担の声をかけを行っている。四季折々の行事や外出、育てた野菜の収穫等、気分転換が図れるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日は庭を散策したり、家族協力のもと、外出、外泊をする事もあり、日曜日は利用者の希望する場所にドライブに出かけている。	交通事情や危険地帯を考慮する必要のない場所にある事業所であるので、散歩や外気浴など、制限なく行うことが出来る状況にあり、利用者の希望通りに戸外へ出掛けられ、家族と共に外出、ドライブ、外泊の利用もあり、本人の思いに添った支援がなされている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理はホームで行っているが、所持している事に安心感を抱いている方には一定額を所持していただいている。利用者の希望に添った品を購入できる支援をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族様に本人が電話できるように支援している。家族様から電話があったらとりつぎ、コミュニケーションの場を提供している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	四季を感じていただけるように壁飾りをかえたり、庭には季節の花植えを一緒に行ったり、行事に合った食事の献立を工夫している。	共用の場としての広めのリビングに新しいデザインの照明や、家庭の台所を思わせるような炊事場と、すっきりとして清潔感あふれる造りになっている。廊下を真ん中として、両側に直列に配置された居室は、見通しも良く、音も聞えやすいことから、利用者の様子や、安全の確保に有効と思われる。トイレの数も多く、利用者本位の状況を察することが出来る。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングで過ごす利用者が多く、テレビの近くにソファ、テーブルを置き、くつろげるスペースを作っている。廊下奥の空間にもイスを置き、外を眺めながら、談笑できるスペースもある。食事席も仲の良い方同士を隣りにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室内は本人が使用していた家具や馴染みの物を置き、イス等、使用している方は本人指定の位置、写真等は視野に入る位置に配慮している。	事業所備品としてベッドのほか、給湯も出来る洗面台や、利用者の希望による椅子の使用もあり、中にはベッド使用ではなく、床に布団を敷き、自宅で慣れ親しんだ就寝スタイルをしている利用者もあり、思い思いの生活が窺える。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居者が自分の居室がわかるように入口に名前や写真等を掲示したり、わかりにくい人には大きく名前を掲示している。入居者の混乱時にはその原因に合わせた環境作りを行っている。		